

『山月記』テスト問題〈第四段落〉

【四】本文について、設問に答えよ。

ほかでもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るころの詩数百編、もとより、また世に行われておらぬ。遺稿の所在もはやわからなくなっている。X ≪、そのうち、今もなお記誦せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作のA巧拙は知らず、Y ≪、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それにB執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいではない、死んでも死にきれないのだ。

袁侏は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に従つて書き取らせた。李徴の声は草むらの中から朗々と響いた。長短およそ三十編、①格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の②非凡を思わせるものばかりである。

≪Z ≫、袁侏は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないかと。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを動かすごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤つてくれ。詩人になりそなつて虎になった哀れな男を。（袁侏は昔の青年李徴の自動癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そつだ。お笑い草ついでに、今の思いをCソクセキの詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているし、に。

袁侏はまた下吏に命じてこれを書き取らせた。その詩に言う。

③偶 因 狂 疾 成 殊 類

災 患 相 仍 不 可 逃

今 日 爪 慎 誰 敢 敵

当 時 声 跡 共 相 高

我 為 異 物 皆 茅 下

君 已 乘 炸 氣 勢 豪

此 夕 溪 山 对 明 月

不 成 長 嘯 但 成 嘯

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風はすでに暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

問一 傍線部A、Cのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えよ。

問二 ≪X ≫、Y ≫に入る語の組み合わせとして、最も適切なものは次のうちどれか。

A X ところで Y だから Z ちょうど

I X ところで Y とにかく Z しかし

U X しかし Y そうして Z おそらく

E X しかし Y もちろん Z そして

問三 傍線部①「格調高雅、意趣卓逸」の意味として、最も適切なものは次のうちどれか。

A 当時の文体としては古く、えりぬぎの人物しか読めないということ。

I 国内のどの作品よりも素晴らしく、思想は常軌を逸しているということ。

U 文章が全体として優れており、表現方法や詩が抜き出ているということ。

E 上流階級の人物にしか読めず、下流階級には読む機会すらないということ。

問四 傍線部②の対義語を漢字二字で答えよ。